

環境概論

持続可能な地域づくり（森の自然エネルギー活用）

日時：平成25年7月20日（土） 13:00～15:00

講師：高野 雅夫（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

概況



「中山間地の持続可能性 ～愛知県豊田市における地域再生の取組から～」
名古屋大学大学院環境学研究科准教授 高野雅夫先生

成長型社会では、限りある地下資源は行き詰まる。ものはなくならず形を変え、再生可能資源は上手くやればまた生態系に戻せるが、生態系を壊したことにより、持続不可能性を抱えているためである。行き詰まらないためには、生態系の中で生きる社会である必要がある。それこそが「千年持続可能な社会」であり、ささやかな一歩を積み重ねることによって実現できる。

高野先生の取組として、らせん水車のマイクロ水力発電による発電量で生活ができることや、自然エネルギー100%で運営する「すげの里」におけるウッドボイラーを使った給湯・床暖房設備、建物本体の構造や、太陽光発電やバイオガスの使用などが紹介された。

山の木の活用の現状とメリットについて、間伐しても二束三文にしかならないため「切り捨て間伐」が大半であることや、林業・製材業・建築業それぞれが成り立つ「カスケード利用」が重要であること、「木の駅プロジェクト」の仕組みや、恵那市や豊田市でのプロジェクト導入事例なども紹介された。また、木質バイオマスは燃料として利用する場合、灯油よりも安上がりであり、木の駅プロジェクトとの組み合わせにより、薪ボイラーを100/1100世帯で導入した場合、地域内燃料費は年間2000万円抑えられ、間伐面積は年間10haになることが示された。

山が守られないと街も守られない。豊田市では「豊田市100年の森構想」が策定された。しかし、いなかは集落の存続が難しく、一方で都市は若い人が将来に希望を持たず、20代の3割は田舎への移住願望がある。豊田市では、準限界集落での地域再生事業として「日本再発進！若者よいなかをめざそうプロジェクト」や「空き家情報バンク」などの取組がされ、中山間地住民と都市住民の新たなコミュニティが芽生えている。

「千年持続学校」は、地域ぐるみでIターンを迎え入れ、100万円程の資金でエコでおしゃれな里山暮らしができる住まいと仕事場を作り、半農多業で自然療法のある暮らしをし、地域の中で高等教育機会を作り出すことがねらいであり、実際の家づくりの様子なども紹介された。そのうえで、集落の維持には若い人の受け入れが必要であり、地元の人がオープンになれるかどうか、いなかと街がどう連携するかが重要であるとされた。